

## 東京都豊島区 文化と産業が循環する都市へ

後藤 和子（埼玉大学経済学部・大学院経済科学研究科教授）

本稿は、豊島区文化商工部文化デザイン課編『としまの文化デザイン これまでとこれから』から許可を得て転載させていただいたものです。

### 1. 総合政策としての文化政策を～2003年豊島区文化政策懇話会の基本的考え方

私は、2003～2004年にかけて、豊島区文化成作懇話会の専門部会長を務めさせていただいた。折しも2001年には、1950年に制定された「文化財保護法」に次ぐ大きな法制度である「文化芸術振興基本法」が制定され、現代アートや舞台美術、メディア芸術等の創造と享受を国が支援する機運が高まり、文化庁予算も1千億を超えるようになっていた。私も2001年に『文化政策学』（有斐閣）を刊行し、文化行政ではなく、市民も文化の担い手となる「文化政策」への転換を構想した。今日では、にしすがも創造舎のようにアートNPOが文化政策の重要な担い手であることはよく知られるようになったが、まだアートNPOなどほとんど知られていなかった頃である。

『文化政策学』では、また、「総合政策としての文化政策を」ということも主張した。文化は単に、文化団体や芸術家のためだけにある政策ではない。文化と福祉、教育、医療、産業、まちづくり等が密接に連携して、生活の質を高めるとともに、魅力的な都市空間をつくることができると考えたのである。

その本を当時、区民部の大沼映雄部長が書店で見つけ、私の研究室を訪ねてこられた。大沼部長は、私の話を聞いてくださり、文化政策懇話会の委員として、文化以外の分野からも豊島区在住の素晴らしい方々を選んでくださった。福祉や都市計画、産業と文化をつなげたいという思いに相応しい委員の顔ぶれであったと思う。

### 2. 地域固有の文化集積を生かしたまちづくり～文化資源マップの作成と文化クラスタ ー構想

懇話会では、福原座長のもと、各委員から自由闊達にアイデアを出していただき、そのアイデアの裏付けとなる調査を行い、政策として具体化するのが私たち専門部会の役割であった。専門部会は懇話会の数倍の回数を開催し、大学院生と職員が自転車で区内を調査し、専門委員全員が、庁舎に日曜出勤して自ら政策案を執筆した。

ある時、懇話会の席上、粕谷一希（『東京人』元編集長）から、豊島区に元々ある文化資源を見直してはどうかという提案をいただいた。今でこそ、文化資源を生かしたまちづくりや文化政策の展開が当たり前になっているが、当時、そのようなことを実際に実行して

いるところはまだなかったように思う。早速、専門部会では、豊島区にはどんな文化があるか議論し、食文化から歴史的資源、池袋モンパルナス、トキワ荘等を掘り起こして「文化資源マップ」を作成した。

この文化資源マップは、その後、豊島区の文化政策を具体的に進めていく上で、役に立ったばかりでなく、少なくない大学の授業で取り上げられ、「あのマップを作ったのは、後藤さんたちでしたか」と言われることがよくあった。文化資源を活用した云々と言葉では言うが、具体的にイメージできるものを作成した意義は大きかったと思う。この文化資源マップを手かがりとして、点在する文化資源に新たな創造を加えて線として結び、ゆくゆくは面として、圧倒的な空間の魅力を作りたいと考えた。それが、「文化クラスター」という考え方であった。クラスターとは、ブドウの房のような塊という意味で、いくつもの文化資源の塊が区内につくられ、それらがやがて相乗効果やシナジーを発揮するという展望を描いた。

懇話会の提言書は、専門部会委員が全員で書いたもので、通常の行政言葉で書かれていない。そのため、担当者の方々は議会での説明にご苦労されたとお聞きした。しかし、文化政策を行政言葉で語っては、いつまでたっても文化行政から文化政策へと転換できない。こうした試みを受け入れ、懇話会の提言をいつも大事にしてくださっている高野之夫区長には、心から感謝したいと思う。

### 3. 豊島区の課題～文化と産業が循環する都市空間政策を

---

振り返ると、2003年以降、豊島区は、先進的な試みを次々とやってきたといえる。他の自治体が参考にしたという声も聞くし、10年で本当に変わったという声も多く聞く。しかし、当初の構想から、まだ、実現できていないこともある。それは、総合政策としての文化政策の実現である。文化と福祉、文化と教育、文化と産業、そしてそれらの総体としての魅力ある都市空間の実現である。

特に、今後の課題としていただきたいのは、文化と産業が循環する魅力的な都市空間の実現である。この間、都市経済を牽引する産業として、クリエイティブ産業や文化産業への関心が高まっている。2009年には、東京都がクリエイティブ産業の実態調査を実施した<sup>4</sup>。私はその際にも、アドバイザーとして調査に加わった。

豊島区にも、少なくないクリエイティブ産業の集積がある。しかし、豊島区の産業政策は、製造業の中小企業支援や商店街活性化という従来の枠に留まっているのが現状である。残念なことに、文化商工部がありながら、産業政策の範囲と政策手法が古いままである。

クリエイティブ産業は、コンテンツ産業より幅広く、建築・デザインから従来のコンテンツ産業、そして舞台芸術や工芸もその対象である。つまり、舞台芸術もある種のクリエイティブ産業である。文化ストックと他の投入要素が結びつければ、文化産業が生まれる。近年では、リゾートホテルにその土地固有の景観や風土、文化を取り込んで、ホテルの価

値を高めたり、越後妻有や直島の実践等にみるように、伝統的な文化や現代アートは、地域活性化に不可欠な要素になりつつある。

今後は、文化への支援を、保護ではなく、文化活動を産業という目線で捉え直し、雇用を生み出し他の産業へと波及する投資と考えてはどうだろうか。産業は都市に活気をもたらす。長い目で創造性を育み、生活の質を高めると同時に、活気あるクリエイティブ産業がどんどん生まれてくるような魅力的な都市空間の創出を目指してはどうだろうか。

---

<sup>i</sup> 文化資源マップ URL <http://www.city.toshima.lg.jp/kusei/>

<sup>ii</sup> 「クリエイティブ産業の実態と課題に対する調査」(東京都産業労働局)